



第1章 地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

品田, 裕 ; 奥村, 弘 ; 井上, 舞 ; 歌井, 昭夫 ; 大下, 朋子 ; 乾, 文男 ; 南田, 潤 ; 室山, 京子 ; 志賀, 蓮子 ; 横山, 朋子 ; 河島, 裕子 ; 木村, 修

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 19 (2020 (令和2) 年度事業報告書) :1-25

(Issue Date)

2021-03-22

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013428>



第1章

地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

第18回 歴史文化をめぐる地域連携協議会 「地域歴史遺産を未来につなぐために－阪神・ 淡路大震災と、地域の取り組みから考える－」

2020年12月19日（土）、第19回歴史文化をめぐる地域連携協議会が開催された。本年度のテーマは「古文書を読む、楽しむ、活かす－コロナ禍の中で考える－」とした。また、今回の協議会は、zoomを用いたオンライン開催となった。

人文学研究科主催の本協議会は、同地域連携センターの1年間の活動を総括する目的で開かれている。例年の協議会では、午前中に第1部として各地域の活動報告、午後より第2部としてテーマに即した報告、第3部として全体討論という構成をとっている。しかし本年は、初のオンライン開催であることを鑑み、午後からのテーマ報告・協議のみとし、また参加者の負担を考慮して、全体の構成を4部制とし、こまめな休憩が取れるようにした。

第1部は「楽しく読む、楽しく続ける」、第2部では「読む楽しみ、活かす楽しみ」として、各地で古文書に関する活動に取り組んでおられる諸団体の方より、報告いただいた。第3部は「コロナ禍の中で考える－オンラインを利用した活動－」として、地域連携センターの事業である、まちづくり地域歴史遺産活用講座オプションプログラムの古文書初級講座と、神戸大学近世地域史研究会より、オンラインを利用した新たな活動形態について報告があった。第4部の全体討論では、特にコロナ禍における活動の変化や、活動を停滞

させずに継続していく工夫などについて議論が集中した。

オンライン開催にあたっては、zoomでの参加方法を示したマニュアルを作成して申込者に送付したほか、参加に不安がある申込者に対しては事前に接続テストを行った。このため、当日は、申込者ほぼ全員が大きなトラブルなく参加することができた。また、今回はセンター関係者および報告者のみ会場に集まり、一般参加者はオンラインで参加する、いわゆるハイブリッド方式を採った。機材の関係で声が聞き取りにくい、ハウリングが起こる、などのトラブルもあったものの、概ね円滑に進行することができた。

これまで地域連携協議会は、会場で参加者たちが顔を合わせ、交流することをひとつの目的としていた。今回のオンライン開催では、それが叶わなかったことが残念であった。しかし、来場することが難しい高齢の方や、県外在住の方の参加が増えたという利点もあった。

当日の参加は39機関89名であった。ひとつのアカウントの前で複数人が集まって視聴されていた地域団体もあったようで、実際の参加者はこれよりも多かったとみてよい。

なお本協議会は、兵庫県教育委員会との共催で開催された。また、協定に基づく人間文化研究機構と東北大学との連携による「歴史資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」、科学研究費助成事業・特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」の一環としても開催された。

以下、当日の記録を掲載する。当日配布された予稿集については神戸大学学術成果リポジトリに

掲載されているので参照されたい。

(文責・井上舞)

第19回歴史文化をめぐる地域連携協議会

古文書を読む、楽しむ、活かす

—コロナ禍の中で考える—

オンライン開催

日時：2020年12月19日(土) 13:00～17:00
要事前申込 定員200名

古文書は単なる「歴史資料」ではなく、人々をつなぎ地域活動に資する、地域歴史遺産となる可能性を秘めています。今回の協議会では、古文書をめぐる各地の様々な活動を通して、古文書の将来的な保存・活用のあり方について議論していきます。またコロナ禍での新たな活動方法についても紹介します。

第1部 楽しく読む、楽しく飾る
報告① 藤井昭夫 (徳島古文書の会)
「地域の古文書を読んで30年」
報告② 大下朋子 (徳島古文書を楽しむ会)
「歴史の古文書を楽しむ会の活動」

第2部 読む楽しみ、活かす楽しみ
報告① 乾文男 (宝塚の古文書を楽しむ会)
「宝塚の古文書を楽しむ会の活動状況」
報告② 南田真 (中野歴史民俗研究会)
「三輪城跡、土庫遺跡発掘を通る文」と
通じた2.28日～活字史料による歴史
研究会の活動報告」

第3部 コロナ禍の中で考える
—オンラインを利用した活動—
報告① 志賀進子 (神戸大学近世地域史研究会)
報告② 富山淳子 (神戸大学学術情報)
「歴史とともに学ぶということ」
—神戸大学近世地域史研究会活動紹介—
報告③ 河島裕子 (尼崎市立歴史博物館)
徳山勝子 (神戸大学大学院人文科学研究科)
「オンラインを利用した古文書の協議会」

神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センター HP に設置した
申込フォームをご利用ください **申込締切 12月16日(水)**
<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~area-c/>

協議会当日、神戸大学へのご来場はお断りしております

問合せ
神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センター
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
TEL/FAX 078-803-5566
E-mail area-c@yokka@people.kobe-u.ac.jp
URL <http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~area-c/>

主催 神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センター
共催 兵庫県教育委員会、科学研究費助成事業「地域歴史文化の創
造と継承」研究グループ「研究代表者・渡辺弘」大学共同利用機関法人
人文文化研究機構「歴史文化資料保存の大学・民間共同推進メ
ットワーク事業」

開催趣旨

神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センターでは、地域歴史遺産の保全・活用をすすめるべく、地域で活動されている様々な方と協働し、事業を進めてまいりました。とりわけ、地域の歴史資料(古文書)に関しては、地域の歴史に触れるための重要な手がかりとして、整理会や読む会、展示会などを通じて、その面白さ、重要性を伝えてきました。

急激な地域社会の変化の中で、滅失の危機にさらされている古文書ですが、一方で、熱心に古文書の整理・判読に取り組まれている方もおられます。読み解くことで地域の歴史を知る。書かれていた内容をまちづくりを活かす。読めなくても、現物に触れることを楽しむ等。古文書をめぐる多様な活動は、古文書が単なる「歴史資料」ではなく、人々をつなぎ地域活動に資する、地域歴史遺産となる可能性を秘めていることを示しています。

しかし、一口に古文書整理・古文書判読といっても、扱う資料の種類、活動に関わる人によって、

活動方法や抱える問題はさまざまです。膨大な未整理の古文書を抱え、整理が追いつかない地域もあれば、身近に古文書が少なく、テキストを確保するのが難しい地域もあります。また、読んでみたいけれどもくずし字の読み方がわからない、近くに古文書を教えてくれる人がいない、といった判読にかかる問題を抱える人たちも少なくありません。せっかく古文書を読む会を結成し、地道な活動を続けていても、参加者の高齢化が進み、一方で新規の参加者が増えず、先細りしてしまうといった継続性の問題もあります。

昨今では新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、多くの人々が一堂に会する整理会や古文書を読む会の開催が困難になっている状況もあります。そうした中でも、感染症対策に工夫を凝らして活動を継続される団体、オンラインを利用して新しい活動方法を模索する団体など、さまざまな動きが始まってきています。

こうした状況を踏まえ、今年度の協議会では「古文書を読む、楽しむ、活かす—コロナ禍の中で考える—」をテーマに、各地で古文書に関わる諸活動に取り組んでおられる皆様にご報告いただくことになりました。また、コロナ禍の中ではじまった、オンラインを利用した活動方法についても紹介いたします。

各団体の多様な活動のあり方に学びつつ、これまでの地域連携センターの取り組みやそこから得られた理念を踏まえながら、地域の歴史を紐解くための身近な存在である古文書の将来的な保存・活用のあり方について議論していきたいと考えています。多数のご参加をお待ちしております。

プログラム

第19回 歴史文化をめぐる地域連携協議会
古文書を読む、楽しむ、活かす
—コロナ禍の中で考える—

- 13:00 開会挨拶
品田 裕 (神戸大学理事 / 副学長)
- 13:05 主催者挨拶
奥村 弘 (神戸大学大学院人文学研究
科地域連携センター長)
- 13:10 問題提起
井上 舞 (神戸大学大学院人文学研究
科特命助教)

第1部 楽しく読む、楽しく続ける

- 13:20 報告①
歌井 昭夫 (高砂古文書の会)
「地域の古文書を読んで30年」
- 13:40 報告②
大下 朋子 (猪名川古文書を楽しむ会)
「猪名川古文書を楽しむ会の活動」

14:00 休憩

第2部 読む楽しみ、活かす楽しみ

- 14:10 報告③
乾 文男 (宝塚の古文書を読む会)
「宝塚の古文書を読む会の活動状況」
- 14:30 報告④
南田 潤 (平野歴史民俗研究会)
「三輪執斎、土橋友直帰郷を送る文」と
過ごした228日～活字史料による郷土
史研究会の活動報告～」

14:50 休憩

第3部 コロナ禍の中で考える—オンラインを利用した活動

- 15:00 報告⑤
志賀 蓮子 (神戸大学近世地域史研究
会)
室山 京子 (神戸大学非常勤講師)
「市民とともに学ぶということ—神戸大
学近世地域史研究会活動紹介—」
- 15:20 報告⑥
河島 裕子 (尼崎市立歴史博物館)
横山 朋子 (神戸大学大学院人文学研究
科事務補佐員)
「オンラインを利用した古文書初級講座」

15:40 休憩

第4部 コメント・全体討論 (～17:00 終了)

- 15:50 コメント
木村 修二 (神戸大学大学院人文学研究
科特命講師)
討論司会 奥村 弘

開催挨拶

品田 裕
神戸大学理事・副学長

皆さま、こんにちは。第19回歴史文化をめぐる地域連携協議会の開会にあたり一言ご挨拶を申し上げます。本日はなにかとご多忙のところ、本協議会にご参加いただき、まことにありがとうございます。今年はコロナに明け暮れた一年でございました。皆さまにおかれましても大変な毎日をお過ごしのことと思います。心よりお見舞い申し上げます。

さて、神戸大学では地域との連携を重視してまいりました。なかでも人文学研究科は大学連携事業の一環として2002年度に地域連携センターを設立いたしました。以来、当センターでは歴史文化や地域歴史遺産の保全活動を目的とする自治体や住民団体との連携事業を進めてまいりました。その後、農学研究科と保健学研究科にも地域連携センターが設立され、大学全体として幅広い分野にわたり、地域連携事業を展開してきております。各事業をご支援いただいている皆さまには、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

また、神戸大学は東北大学とともに2019年度よりはじめた大学共同利用機関法人人間文化研究機構による各地の大学による歴史文化資料の保全の取り組みを推進する事業「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」の拠点大学の一つとなっております。

さらに昨年度からは科学研究費補助金特別推進研究、この特別推進研究というのは全国のさまざまな研究の中でも特に重要と認められたものなの

ですが、これに「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」が採択され、人文学研究科地域連携センターはその拠点施設として全国の研究者と連携しながら調査研究に取り組んでいるところでもあります。

人文学研究科地域連携センターでは、年度の終わりに1年間の活動を集約する意味を込めて県内の自治体職員、市民団体の代表者、大学関係者の皆さまとともに、地域の歴史文化について議論するための協議会を開催しております。本年度第19回の協議会では「古文書を読む、楽しむ、活かす」というテーマで開催いたします。地域に残る古文書は地域の歴史に触れるための重要な手掛かりの一つです。地域連携センターではこの間、さまざまな活動を通じ、その面白さ・重要性を伝えてまいりました。また、今日の報告に代表されるように、各地域においてもさまざまな取り組みが行われております。古文書は単なる歴史資料ではなく、人々をつなぎ地域活動に資する地域歴史遺産となる可能性を秘めていることを示していると思います。しかしながら、こうした活動を継続していくにあたっては、さまざまな課題があるのも事実です。加えて、昨今では新型コロナウイルスの感染拡大防止のため整理会や古文書を読む会の開催が困難になっている状況も生まれております。一方で工夫を凝らし活動を継続される団体、オンラインを利用した新しい活動方法を模索する団体などさまざまな動きが始まってきているとも伺っております。

こうした状況を踏まえ、今年度の協議会では「古文書を読む、楽しむ、活かすーコロナ禍の中で考えるー」をテーマとし、各地で古文書に関わる諸活動に取り組んでおられる皆さまにご報告いただくことになりました。コロナ禍で始まったオンラインを利用した活動方法についてもご紹介がございます。各団体の多様な活動の在り方に学びつつ、これまでの地域連携センターの取り組みやそこから得られた利点を踏まえながら、地域の歴史をひも解くための身近な存在である古文書の将来的な保存活用の在り方について議論が大いに盛り上が

るものと期待しております。

最後になりましたが、本協議会を共催していただきました兵庫県教育委員会をはじめとする諸機関の皆さまや、ご協力をいただいた関係者の皆さまに対し神戸大学を代表して深く感謝申し上げます。

本協議会が実り多いものになりますことを祈念いたしまして簡単ではございますが私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

主催者挨拶

奥村 弘
神戸大学地域連携推進室長
人文学研究科地域連携センター長

地域連携センター長の奥村です。本日はコロナ禍のなかで、慣れないオンラインツールや電子機器を使用しながら、なんとか地域連携協議会を開催することができました。進行が滞る場面もあるかもしれませんが、半日の間、皆さんとともに議論を深めていければと思っております。神戸大学の文学部は1年生を含め学生がほとんど大学に来ることができないまま12月を迎えました。大学だけでなく、人が集まること自体が困難になっております。そのため、古文書を読む会や祭礼行事など、地域の歴史文化に関わる催し物が大変開催しにくい状況です。下手をすると来年以降もこの状況が続くかもしれません。

こうした中、当センターでは、何とか地域と連携できる方法はないかと探ってまいりました。本協議会もその方法を見つけていくための場になると期待しています。参加者のお名前を見ていると、当センターの事業にご協力いただいている方や一緒に活動している方がたくさんおられるようです。初めて参加された方も含め、皆さんとともに歴史文化に関わる新しい方向性を探ることができればと考えています。それはきっと兵庫県のみならず全国的にも意味があるものになるはずで、それでは皆さん、どうぞ半日の間よろしくお

願い申し上げます。

趣旨説明

井上舞
神戸大学大学院人文学研究科

それでは協議会に入っていきたいと思いますが、まずは私より本日の協議会のテーマについて問題提起をいたします。

さきほどの品田理事の挨拶にもありましたが、古文書は地域の歴史を知る上で重要なツールとなります。ただし一方で、「くずし字」という我々が習ってこなかった字で書かれているために、「学ばなければ読めない」というハードルがあります。それが古文書に親しむ際の一つの壁となっています。

しかしながら、各地域では「古文書を読む会」という活動が展開しています。当センターが関わっている地域にも必ず1つか2つ「古文書を読む会」があります。これは古文書が単なる歴史資料ではなく、人々をつなぎ地域活動に資する地域歴史遺産になる可能性を秘めているものであることを示しています。

実際、「古文書を読みたい」、「読んで中身に触れてみたい」という要望をお持ちの方はかなりたくさんいらっしゃいます。これが「古文書を読む会」ができるきっかけになるわけですが、講師の先生が見つからない、史料がそもそも残されていない、といった課題を抱えている会もあります。あるいは、古文書が大量にありすぎてどこから手をつけてよいか分からない、活動を始めてみたものの長続きしない、参加者が増えない、といった課題を抱えている会もあります。また、人が集う場であるため、昨今のコロナ禍ではどうしても開催しにくく、活動を休止している会も多いと思われます。

以上のような状況を踏まえまして、本日は「古文書を読む会」に参加している方々に、これまでの活動やコロナ禍における新しい取り組みについてご報告いただきます。プログラムは3部制

になっています。まず第1部では「楽しく読む、楽しく続ける」をテーマに「高砂古文書の会」の歌井昭夫さんと「猪名川古文書を楽しむ会」の山下朋子さんにお話いただきます。「高砂古文書の会」は今年で創立30年目を迎えるということで、お話の中から長く活動を続けるためのヒントが得られるものと思われます。また「猪名川古文書を楽しむ会」は女性の参加者が大変多い点に特徴があります。そこで、女性の視点から古文書を楽しむことについてお話いただきます。

続く第2部では「読む楽しみ、活かす楽しみ」をテーマに「宝塚の古文書を読む会」の乾文男さんと「平野歴史民俗研究会」の南田潤さんにお話いただきます。ご両名には会の活動を古文書の「活用」の観点からお話いただきます。

最後の第3部は「コロナ禍の中で考える—オンラインを利用した活動」をテーマにしました。新型コロナウイルスの感染拡大によりさまざまな活動が制限される中、オンラインを利用して活動を続けていこうとする取り組みが始まっています。これに関しては「神戸大学近世地域史研究会」の志賀蓮子さんと室山京子さん、それと神戸大学大学院人文学研究科と当センター主催の公開講座「古文書解説初級講座」で講師を務めた河島裕子さんと事務担当の横山朋子さんにお話いただきます。

以上の報告を通して本協議会のテーマである「古文書を読む、楽しむ、活かす」について皆さまと議論したいと考えています。それでは本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

第1部 報告① 地域の古文書を読んで30年

歌井 昭夫
高砂古文書の会

皆さん、こんにちは。「高砂古文書の会」代表の歌井でございます。本日は「地域の古文書を読んで30年」という題目で報告させていただきます。30年間の活動を20分で説明いたしますので、

端折ったところも多々ございますがよろしくお願
いいたします。

「高砂古文書の会」は高砂市内の方を中心とし
た市民グループで、地域の古文書を解説し、そ
の成果を広く発信することを目標としています。
1990年12月に発足しまして、今年がちょうど
30年目にあたります。会員は18名で内9名が
女性です。例会を月2回、19時から21時まで
の時間で開いています。2年前までは月3回開催
していました。会場は高砂市曾根町に位置する曾
根天満宮社務所をお借りしています。「習うより
慣れろ、細く長く」をモットーに30年間活動を
続けてきました。教材は高砂市有文書のほか、地
域の寺社や民家に残る古文書・軸・短冊などです。
内容は手紙文・紀行文・漢詩・漢文・和歌・俳句
など多種多様です。解説に関係ある史跡などを散
策する現地研修も行っています。また、解説した
成果は解説本の刊行や講演会を通じて発信してい
ます。年に1回定例の食事会や解説本刊行時の
打ち上げなど会員の親睦を深める会も催していま
す。残念ながら今年はコロナの影響で中止になり
ました。会費は年5000円となっています。

会場としている曾根天満宮には文化資料館が設
置されており、定期的にさまざまな資料が展示さ
れています。秋季大祭や正月に合わせ、曾根天満
宮文化資料館運営委員会の主催で過去17回展示
を催しました。この展示会に合わせて、当会は古
文書・軸などの展示物や関連文書を解説し、図録
やキャンペーンに供しました。展示には高砂に
縁の深い田能村直入や曾我蕭白、棟方志功、橋本
関雪などが取り上げられてきました。コロナの影
響で秋のお祭りや正月の写真コンクールが中止と
なり、その代替行事として来年1月1日から17
日にかけて「橋本海関・関雪父子展」が開催され
る予定です。入館料は無料なのでぜひご観覧いた
だけたらと思っています。

つぎに解説本の刊行についてお話しします。曾
根天満宮神職の曾根陸奥守豊継が大宰府天満宮
参詣の旅の途中に詠んだ和歌を添えた安永三年
(1774)の紀行文の解説成果をまとめた『宰府参

詣日記』を2007年6月に刊行しました。これ
が解説本としては最初の成果となります。それか
ら、2016年2月には曾根村の庄屋で俳人の入江
樵風が書き残した随筆集と京都から奈良を経て大
坂に至るまでの紀行文などの解説成果『鶏口集を
読む』を刊行しました。翌年3月には高砂出身
の町人学者・山片蟠桃の寛政四年(1792)の金
毘羅参詣の漢文の紀行文の解説成果『草稿抄を読
む』を刊行しました。その年の11月には歌舞伎
で有名な高砂の船頭・天竺徳兵衛のシャムへの渡
海記の写本の解説成果『天竺渡海道中記を読む』
も刊行しています。最新のものは2019年12月
に刊行した『播姫太平記を読む』です。これは、
寛延二年(1749)の姫路藩百姓一揆の顛末を物
語風に記述した実録文学10巻の解説成果となり
ます。解説本の刊行に際しては自費出版のほか、
文化庁・高砂市・高砂ロータリークラブ・播磨学
研究所・篤志家などからの補助金をいただいでお
ります。予稿集には『草稿抄』の刊行に関する『神
戸新聞』の記事を載せましたが、そこにあります
ように神戸女子大学の今井修平教授から「山片蟠
桃の思想が従来と違った角度から見え、価値のある
研究」と評価をいただきました。

講演会を通じての会の活動成果の発信も行っ
ています。高砂市立松陽高齢者大学の学年毎のカリ
キュラム、高砂市民講座高砂学の講演会、姫路藩
の学問所・申義堂での講演会、県指定重要文化財
の入江家での公開記念講演会などなど、講演の機
会を多くいただいでおります。なかでも国際的に
活躍されている朗読家・阿部麻里氏とのコラボ朗
読会はテレビ放映も実現しました。以上の講演会
の様子についても関連する新聞記事などを予稿集
に載せていますのでご覧ください。

以上の解説本や講演会のほかにもさまざまな活
動を行っています。2016年11月には初心者向
きの古文書解説講座を開設しました。これで高砂
市内の古文書教室は二つ目となりました。会場は
お茶と茶道具の専門店・宇治園の閉店後の店内を
利用しています。実は店長さんが会員であったた
め、会場提供のお申し出がありそのご厚意に甘え

てお借りしています。茶道関係の方が会員でほとんどが女性です。

それから解読成果としてご紹介した天竺徳兵衛の渡海記の写本ですが、これは水害被災品の整理中にたまたま民家でみつかったものです。解読本の刊行を機に、さらに市内で写本が2点みつかりました。徳兵衛ゆかりの高砂の地で現存が確認されたのは大変意義深いことだと感じます。

さらにこれもさきほどの解読成果で名前が出てきました山片蟠桃ですが、彼の名前「蟠桃」は中国の3000年に1回花が咲いて実がなるといわれる伝説の桃に由来するようです。ところが実際「蟠桃」は毎年花が咲いて実がなるとしても実在していません。この桃の存在が分かったので、香川県の果樹園より取り寄せて山片蟠桃の菩提寺・覚正寺の顕彰碑に供えました。こちらに関連する新聞記事を予稿集に載せましたが、この記事を見て「蟠桃」の苗を100本も植えて育成しはじめた方もいるようです。実がなったらご招待したいということで、近い将来実現することを楽しみにしているところです。

まとめに入ります。まず例会の会場を提供してくださっている曾根天満宮の関係者の皆さんには、あらためてこの場で感謝申し上げたいと思います。会の運営に必要な教材は高砂市有文書や地域の寺社や民家に残る古文書・軸・短冊など豊富であり、この安定した状態をしっかりと維持できるよう努力したいと考えています。30年間の活動を振り返ると会員のほとんどが世代交代をしました。解読成果をまとめる際には残していただいた解読ノートの手紙はとて大きく、先人に感謝したい。また、これまで大きなもめ事もなく、会の運営は順調でありました。たまには小さなトラブルもありましたが、当初は私たちの活動に対して「あの人たち、何しているんだろう？」という視線も多かったのですが、解読成果を発信し続けたことによって会の存在は広く知られるようになり、市民権を得た感じがいたします。今後も地域の人々とより深く関わりながら、古文書を通して身近な歴史を掘り起こし、その成果を広く発信し、

次の世代にしっかりとバトンタッチしていきたいと考えています。私の報告は以上です。ご清聴ありがとうございました。

第1部 報告②

猪名川古文書を楽しむ会の活動について

大下 朋子
猪名川古文書を楽しむ会

「猪名川古文書を楽しむ会」の大会と申します。よろしく申し上げます。いま高砂の歴史ある活動をお聞きして大変感心しました。

私たちの会は2016年5月21日に第1回例会を開催し発足としました。設立のきっかけは、猪名川町公民館で開催された平成25年度「歴史講座 猪名川町にのこる古文書を読んでみよう」や、平成26年度から27年度にかけて同所で開催された「歴史講座 初歩からの古文書解読」を受講したことが始まりです。古文書の魅力を感じはじめ、辞書も何とか引けるようになり。古文書が少しずつ自分のものになりはじめていく実感を味わうようになっていきました。

ところが、町運営の講座は平成28年3月をもって終了することになり、継続を希望するなら自分たちで会を作り継続し運営もしてくださいとのお話があり、突然のことに戸惑っていたところ、神戸大学の木村修二先生から参加者をご希望なら引き続き講師を引き受けますよとの申し出があり、継続希望者10名の署名を集め継続することが決定しました。

こうして私たちの会が歩み始めました。思い返せば、町の要望は自主的な生涯学習の場を与えてくださったのではないかと理解しています。

今年は4月から8月まで新型コロナウイルスの影響で休講となり、9月からやっと再開することができました。場所は猪名川町の日生公民館で、毎月第三土曜日に木村先生の指導のもと、猪名川町域に残る古文書を中心に解読を行っています。

会員の年齢はご多分に漏れず熟年世代ですが、在籍者17名で常時12・3名の出席があり月に

一度くずし字を楽しんでいます。経験者もいますが、ほとんどは初心者です。5年目を迎え少し余裕ができ楽しみになりつつあります。

これまで13点の古文書を読みました。文脈を捉えるのはまだ難しいのですが、鎌倉村の村役人が当時の代官・内藤重右衛門に願い出た古文書の「覚」はくずし字解読からそれた感慨を覚えました。請山の御林に自生する「鼠茸」をめぐる話ですが、村の女や童が御林に毎日入り込み朝夕に焼いて食べ、その上、苗木を踏み荒らすので、御林の立木焼失を恐れた村役人が秋の30日間ほど山番をつけて入り込み防ぎたいと願い出たときのもので、村にとっては一大事ですが、村の女や童は請山という事情をよく理解できないまま、そのような行為に至ったのではないかと思うと、嬉々として焼きキノコを食べる童たちの声や動きが手に取るように想像され、なんとも微笑ましい情景に思いを馳せました。この時、古文書は人の好奇心をかき立てる楽しいものであることに気づきました。しかれども火の用心は大切です。「鼠茸」は「箒茸」とも呼ばれ姿は舞茸に似た薄紫色だそうです。これまでお目にかかったことはありませんが、東北の奥会津地方では貫目がkgに変わり、高値でネット販売されているようです。ひょっとして猪名川町の北部で地元の山持ちの家ではいまも密かに食されているのではと余計な想像もしています。時間が出来たら調べてみたいと考えております。

猪名川地区の歴史を特徴づけるのは銀・銅山の存在です。この地方の採銅は伝承のうえでは天平十四年(742)東大寺大仏鑄像の時とも言われています。多田銀山付村として幕府直轄領と位置づけられ、幕府代官が支配、時事的？な運営を村役人が行い、その村役人の多くが多田御家人で、その系譜を引く名望家の家には古文書が大切に保管されています。また、猪名川地区で生活していた先人の人と古文書を通じての出会いに意外な感動を覚えています。木村先生のご厚意もあって生まれたこの会を継続して古文書の世界を楽しんでいけたらと願っております。

最後になりますが、先日会員にお願いしたアンケート「古文書を楽しむ会」の集計結果を要約しましたのでお話させていただきます。「不思議な匂いにひかれて入った。公立図書館が運営している入門編をネットで検索」、「京都の町歩きが趣味、貴重な資料、読み解き、住んでいる日本の歴史、村々の争い、お上とのやり取りが手に取るように分かり面白さが何倍にもなった」、「歴史上の貴重な史料を読めればと思った」、「ネットで大学、各地の図書館を検索してチャレンジ、ボケ防止も兼ねての古文書の勉強はピッタリ」、「古文書に苦しみ」ことも、しかし続けたい気分は無くならなかった、「回数を重ねて解読が増すにつれ苦しみを楽しみになって来ました」、「読みに詰まったら、自力で読めるようにヒントを出し指導される」、「言葉に関連する事項にも話が進むので理解をより深めることが出来ました」、「くずし字「一字」を理解するまで教えてくださる熱意に感銘しています」。共通して読み取れるのは「読めればいいな」から「もっと読めるようになりたい」という大きな前進です。

いつの間にか、私たちも後期高齢者となり、周りでも思いもかけない辛いこと、悲しいことが多いなか、新しくチャレンジできる古文書との出会いに本当に感謝しています。いろいろと視野が広がっているようにも思います。簡単ですが報告は以上です。ありがとうございました。

第2部 報告③ 宝塚の古文書を読む会の活動状況

乾 文男
宝塚の古文書を読む会

「宝塚の古文書を読む会」の世話人をしている乾と申します。代表が高齢のため、代行としてお話させていただきます。十分な報告にはなりませんが、その点をご容赦いただきたいと思います。私自身は古文書についてそれほど関心・興味はなかったですし、くずし字についても知識はない状

況で会の活動に携わることになりました。まだ活動に参加するようになってから6年なので、右往左往する場面もあります。

最初に「宝塚の古文書を読む会」の発足と経緯についてお話します。詳細は木村修二先生や大國正美先生がまとめられたものを私なりに年表化して予稿集に載せましたので、そちらをご覧ください。ここでは簡単に触れていきます。1995年1月に阪神・淡路大震災によって宝塚は大きな被害を受け、多くの歴史的遺産が滅失の危機に瀕していました。古文書も同様です。それらが歴史資料ネットワークの精力的な巡回活動調査により救出されました。またその過程で、飯野藩の旧米谷村の庄屋であった和田家の土蔵からは新たに3000点以上の古文書が見つかりました。市史編纂に向けて調査されていた分を含めると約4200点を数えます。

翌年になると、歴史資料ネットワークと宝塚市立中央図書館市史資料室の共催で「歴史講座 宝塚の古文書を読む会」が開催されました。これは発見された古文書の調査結果を地域へ発信、還元すること、地域の人に古文書やそれを通じて見えてくる歴史に関心を持ってもらうことを目的としたものです。講座は3回行われましたが、大変人気があり予想を上回る参加者を得ました。その後、この講座の活動を継続させようとする動きがでてきて、新たな学習グループが誕生しました。これが「宝塚の古文書を読む会」です。この会は、代表に和田正宣氏をお迎えして、8名の世話人のもとで自主的な運営を進めていく方針をとりました。古文書を読むに当たっては和田家から発見されたものを基本としましたが、講師による古文書解説・解説の一方通行の形式ではなく、自主的な運営を目指す会の理念に沿って途中から会員が参加できる輪読形式に移行しました。

解説した「和田家文書」は原文と翻刻を一つにまとめて、会誌『源右衛門蔵』(げんよみぐら)に掲載するようになりました。この会誌には会員の自由なテーマによる寄稿文もあわせて掲載するよ

うにしており、会の活動を発信する媒体となっています。現在22号まで発行しており、図書館や大学などにも寄贈しています。

また、2006年には古文書解説の基礎入門講座として、会員による初心者向けの「宝塚の古文書を読む寺子屋」が開設されました。旧和田邸を会場に畳の上で昔の雰囲気を感じながら勉強できる環境で、公募で受講生を募って実施しました。私自身もこの寺子屋の出身です。ただし、和田代表を含め主催者側の高齢化などで運営が難しくなり、2017年には閉講することになりました。

ところが、閉講を惜しむ声から上がってきたので、2019年に「新寺子屋」として再興することになりました。旧寺子屋では春秋に各3回ずつ同一内容の講座を実施していましたが、それではどうも

消化しきえない部分もありましたので、新寺子屋は年6回を一括りとする講座にしました。独自に作成したテキストを受講者に事前配布するのですが、基礎講座として最低限学ぶべきことを記した基礎資料編のほか、本編として宝塚に残る古文書を解説文とあわせて載せています。これによって予習と復習が可能となりました。講座は3月の受講手続き、講師紹介、開校式、オリエンテーションの後、4月～6月と9月～11月に行われます。1年目はうまくいったのですが、今年はコロナの関係で延期に延期を重ねたあげく、結局中止となりました。現在は次年度に向けて準備を進めているところです。

「宝塚の古文書を読む会」は毎月第二日曜日に講師を招いて史料を輪読する定例の学習会を開いています。これに加え、「互学会」(たがいにまなぶかい)、「楽学会」(たのしくまなぶかい)、読書会といった分科会を設けています。会員の方は希望すれば参加できるようになっています。時にはフィールドワークへ繰り出すこともありますが、現在はコロナの関係でなかなかできない状況です。

最後に会の運営と課題についてお話します。現在は会則を整備して代表を中心に10名程度の世

話人により運営しています。会場は宝塚市立中央図書館のご厚意で会議室を提供いただいているのでそこを利用しています。課題については、自主的な運営を心がけているので、高齢化が進めば進むほど引き継ぎの問題が大きくなってきます。会の構成員の年齢層の歪さが目立つようになってきており、若い新会員の募集をどう進めていくかが課題です。また、会の財源確保や活性化、あるいは寺子屋や分科会などを継続してくためのリーダー的な役割を担える人材の育成も課題となっています。

私個人の話となりますが、実は私の家も庄屋を務めており、古文書や書籍がたくさん残されています。古文書については11月に宝塚市へ寄贈しました。まだまだ地域にのこされている史料はたくさんあると思います。なんとかか会のメンバーと協力しながら発掘し公に示していければと考えています。ご清聴ありがとうございました。

第2部 報告④

三輪執斎、土橋友直帰郷を送る文」と過ごした228日～活字史料による郷土史研究会の活動報告～

南田 潤
平野歴史民俗研究会

皆さん、こんにちは。平野歴史民俗研究会の南田潤と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。お手元の予稿集に沿ってお話をさせていただきます。

「古文書」を「肉筆による一次史料」と捉える方が多いと思いますが、先学の仕事になる史料集も重要な「歴史資料」として「古文書」の対象と考えます。そのような観点から、今回は活字史料を主に用いて地域史研究に取り組んでいる「平野歴史民俗研究会」の活動報告をさせていただきます。

今年の10月11日の「平野歴史民俗研究会」の定例会で、私は『平野含翠堂史料』（清文堂、

1973年）所収の活字史料について研究発表をさせていただきます。予稿集に掲載している漢文史料がそれに該当します。これは元禄十六年（1703）に三輪執斎（35歳）から土橋友直（18歳）に送られた文です。土橋友直が平野から京都に遊学して3年間過ごした後、帰る際に三輪執斎から送られたものです。この史料の一部は、津田秀夫『近世民衆教育運動の展開』（お茶の水書房、1978年）のpp.146-147に三輪執斎の紹介とともに、返り点が打たれ、意味の概略が記されていますが、詳しい記述ではありません。そこで私は、この文に込められた三輪執斎の思いや、それを受け取った土橋友直がどのように感じたのかを深く知ることで、二人の気持ちに少しでも近づきたく思い、この文の徹底解説を試みました。

解説の前に研究のきっかけと含翠堂のお話をします。2004年に息子が通う幼稚園で「平野郷の歴史」という講演会に参加して初めて私は土橋友直のことを知りました。友直は、貞享三年（1686）、和泉国貝塚で薬商を営む利孫左衛門の次男として生まれました。彼は12歳の時に、摂津国平野郷の三上家へ養子として迎えられます。平野郷には七名家（しちみょうけ）と呼ばれる七軒の指導者的立場の家柄があり、三上家はその一つです。そして、三上家の娘で2歳年下の「とよ」と結婚し、同じく七名家で後継ぎが絶えていた、土橋家を夫婦そろって継ぎます。その後、友直は16歳から18歳までの3年間、京都に遊学して、医学、和学、歌学、儒学を学びます。その時に知り合った17歳年上の儒学者で陽明学研究の第一人者・三輪執斎から多大な影響を受けることになります。

平野に戻った18歳の友直は、郷内の子弟に講習を始めました。そして14年後の享保二年（1717）5月5日、32歳の友直が中心となって郷学「含翠堂」を設立しますが、その10年後の享保十二年（1727）10月2日に42歳の若さで亡くなります。

当時40歳だった私は、42歳の志半ばで亡くなった友直に非常に思い入れを持ちまして、友直のことがさらに知りたくなりました。それから、

地元の歴史関係の催し物に参加したり、友直のお墓がある大阪府八尾市の「神光寺」を訪ねたり、友直の生まれ故郷である貝塚に足を運んだりしました。

友直が創設に関わった「含翠堂」は平野にある顕彰碑の碑文で紹介しておきます（以下、碑文は予稿集掲載のものを転載）。

含翠堂は摂津国平野郷市長町に 享保二年（1717）五月五日 土橋友直ら郷内好学の同志が創設した学校で 150 余年間存続し 明治五年（1872）学制公布により閉校した はじめは庭の老松にちなんで老松堂といたが 三宅萬年が范魯公の「鬱々含翠堂」の詩から採って含翠堂と改めた

その隆盛が刺激し啓発して7年後に懷徳堂の開設を導いた 「万代のみとりをふくむこのもとに聖のふみのまとみひろめん」と誠心誠意郷民を教化しただけでなく その経営はすべて同志の寄金とその運用で維持され 飢饉のさいもたびたび窮民を救済したことは 他の学塾にみられない特色である ここに碑を旧趾に建て この輝かしい郷学の伝統を顕彰し 郷土文化発展の資とするものである

大阪大学名誉教授 梅溪 昇
昭和六十年五月五日 建碑 平野戸主会

平野という地名は各地にあります、大阪市の東南部に位置する旧平野郷町は、独自の地名伝承を持っています。坂上系凶広野麿の項に「平野、元は杭全庄ト云、広野麿所領之後、広野ト云、後広ノ字ヲ憚リテ平野ト云、則于今存名ス。」とあり、9世紀のはじめ、征夷大將軍・坂上田村麿の次男・広野麿は朝廷よりこの杭全荘を賜り所領としたことが書かれています。そして平野という地名は、広野が転訛したものと伝えており、広野麿の墓や妹の春子が創建した「長宝寺」、子の当道が9世紀半ばの貞観年間に地主神を祀った杭全神社が平野に存在するのもこれに由来するものと思われま

す。以上は、故村田隆志氏の「平野の歴史」（杭全神社編『平野法楽連歌～過去と現在～』和泉書院、1993年所収）を参照しました。村田さんは「平野歴史民俗研究会」の創設者でもあります。

ここからはこの研究会についてお話します。「平野歴史民俗研究会」は、中世以来自治都市として栄え、近世在郷町としても著名な平野郷（大阪市平野区）の歴史や民俗を学び、そのことを通じて過去と現在、そして未来を考えることを目的とした研究会です。これについては、会の最長老であらせられる黒瀬泉氏の「平野歴史民俗研究会のなりたち」（大阪歴史学会編集兼発行『ヒストリア』第279号、2020年所収）を参照しました。

現在会員数は14人です。その内12人がご高齢の長老方です。毎月第二日曜の13時から17時に定例会を開き、前半は担当者が調べてきた研究報告をする場で、後半は会員間でワイワイ話す座談会となります。その時の話が非常に楽しくて参加しています。

こうした定例会とは別に、地域社会と関わった活動も行っています。2017年5月5日には「含翠堂創立300周年記念のつどい」を主催しました。2018年9月には「山上家文書」を発見しました。これはある時に「屋敷と古い蔵を解体するので、もし中身にご興味があれば見てもらっていいですよ」というお話が区役所を通じて会にあり、調査させていただいたところ、元禄以降の文書が約500点出てきました。これらは含翠堂の運営にも携わっていた有力者・山上家に伝わったもので、平野郷の歴史にとって大変貴重なものであることが判明しました。その後、ご当主様から会にご寄贈いただき、現在会員で整理作業を行いながら、一部は翻刻して例会で報告を行っています。ちなみに、ご当主様のお話によれば、数十年前、会の創設者である故村田隆志さんが、蔵の中を調査させてほしいとお願いに伺ったところ、当時はお断りされたようです。蔵の解体にあたってそのことを思い出し、区役所に問い合わせたそうなんです。ですから、村田さんの行動がなければこの史料群は遺されなかったかもしれません。

2018年12月には黒瀬泉氏が長年にわたり保管されていた道標が元の場所に再設置されました。この道標は明治三十九年(1906)に大阪府によって設置されたのですが、道路工事により撤去された後、長らく民有地に保管されている状態でした。会のほうで元の場所を検証して、約90年ぶりの再設置となったわけです。

以上のような活動を会として続けてきたわけですが、ここからは本報告の主題に戻りまして、三輪執斎から土橋友直に送られた文の読解について述べていきます。この文は漢文なわけですが、私は2001年から8年間、京都大学文学部中国哲学史研究室に聴講生として通って漢文を勉強しました。最初に漢文解読で一番大事なことをまとめた「漢文初歩」というプリントをもらったのですが、そこには「出典を調べないと漢文は読めない」、「出典と用例の違いをはっきり意識すること」、「出典を持つ言葉の意味は典拠となる文章の文脈と、伝統的注釈によって決定する」、「出典を持たない言葉の意味は、辞書に書かれている意味を鵜呑みにせず、用例文とも照らし合わせ、自分で読んで考える」、「中国の書物に対する知識、すなわち用例にあげる書物は、それぞれがいつごろ誰によって作られたどんな内容でどんな意味で重要かということ、が必要となってくるので、まずは「目録学」を学ばねばならない」といった5つのポイントが書いてありました。

三輪執斎から土橋友直に送られた文の解読は2020年2月20日から始めましたが、何度も壁にぶち当たり、数日、数週間、最長は1ヶ月、同じ箇所から抜け出せないことがありました。作業開始以降、この文を書き写した紙を肌身離さず持ち歩き、毎日、5分でも10分でも少しの時間があれば眺め、色々思案を続けました。

9月18日に「本編」として史料の訓読・現代語訳、「注釈編」として出典書物の解説、当該箇所の段落全部の原文・訓読・現代語訳の資料を完成させましたが、自信がなかったので、聴講生の時にお世話になった京都大学・人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター助教で朱子学

がご専門の福谷彬さんに内容を見ていただき、大きな意味のはき違いや、根本的な間違いの有無についてご教授いただきました。その後修正をして、10月4日の完成まで228日かかりました。

三輪執斎から土橋友直に送られた文は244文字の短いものですが、その中には中国古典『論語』・『孟子』・『大学』・『中庸』・『荀子』・『論語集解』・『晏子春秋』をはじめ、伊藤仁斎の『論語古義』・『童子問』などからの引用が9箇所ありました。書き手の三輪執斎の経歴を見れば、四書五経をはじめ中国古典に精通していたと思われ、言葉だけを引用したのではなく、原典の内容を熟知した上で字句を重ねていったと考えられます。

この成果を10月11日の会の定例会で発表したのですが、三輪執斎と土橋友直の人生年表に60分、「本編」に30分、「注釈編」に90分、合計3時間の時間を要しました。この日出席した会員全員が、二人の気持ちに寄り添えた、と実感を持つとともに、当時18歳の友直にとってはこの文が将来の活動につながる大変重要な役割を果たした、と確信しました。この文は福谷さんから「三輪執斎の高い見識がうかがえる格調高い文章」と評価されており、読めば読むほど味わい深く、発表以後も毎朝音読するのが私の日課となっています。これが私にとって「古文書を読む、楽しむ、活かす」ことの実践となっています。最後にせっかくなのでこの文を音読させていただきます。

三輪執斎 土橋友直帰郷を送る文 元禄癸未
土橋丈の南撰に帰るを送るの序

友人土橋友直は京師に遊学し、今茲十一月まさに郷里に帰らんとす、予に謂いて曰く善を責むるは朋友の任なり、且つ禮に曰く人に贈るに物を以てするは人に贈るに言を以てしかず、吾氏今まさにいずれの言を以て予に贈らんとするか、予曰く甚だしいかな吾氏の言を聞かんと欲するは、これ昔人の以て難しと為すところなり、吾これを聞いて曰く身自ら厚くして薄く人を責む、また曰くこれを己に有して後に人を責む、予の性偏急にして、

かつて一善これを得ること無し、しかるにただ人にこれを責め、辯佞捷給して以て己の過を文り儉功窺察して以て人の私を発き、言を拒み非を遂め害を招き怨を結べば蕩々として帰るを知らざる者多年なり、一旦この訓を觀て、しかるのちこれを以て己においてこれを省みることあれば、すなわち昏愚の資悖妄の学はまさにこれを愧作せんとして勝えず、しかしてなんぞ以てもしも未だ及ばざる所を責むる暇あらんや、しかりといえども吾子のそのよく予を以て戒めと為す、すなわちこの言なり、また以て贈と為すに足らざるや、遂書

以上となります。ご清聴ありがとうございました。

第3部 報告⑤

市民とともに学ぶということ－神戸大学近世地域史研究会活動紹介－

室山 京子
神戸大学非常勤講師
志賀 蓮子
神戸大学近世地域史研究会

室山

よろしくお願いします。神戸大学大学院人文学研究科非常勤講師の室山と申します。本日は「市民とともに学ぶということ」と題しまして、「神戸大学近世地域史研究会」の活動をご紹介します。まず私からオンラインも含めた例会の活動内容を簡単に紹介した後、設立当初から参加されている志賀蓮子さんに当研究会についての思いをお話していただこうと思います。

お手元の予稿集に沿ってお話していきます。「神戸大学近世地域史研究会」は2006年3月に発足し、今年で15年目を迎えました。前提として、2002年から始まった神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターと合併前の新宮町との共同研究「兵庫県新宮町における地域資源としての歴史文化遺産の調査および成果の刊行」があります。その成果として、2004年から2005年にかけて

『播磨新宮町史』史料編Ⅰ・Ⅱが刊行されました。ところが、新宮町が近隣の市町と合併して「たつの市」が誕生し、新宮町市編纂室は解散しました。『播磨新宮町史』に掲載できなかった江戸時代の史料を活用する場を設けるべきだという機運があり、近世支部会の執筆メンバーを中心に「神戸大学近世地域史研究会」を発足することになりました。その後、当研究会では史料調査やフィールドワークを行い、研究成果を載せた冊子を発行してきました。なお、発足以来会を引っ張ってきたのは現在尼崎市立歴史博物館に勤務されている河野未央さんです。私は2016年から運営担当となりました。

会員は私も含め現在14名です。阪神地域やたつの市にお住まいの方々です。年齢は60代以上の方が多いです。会員は20名前後の時期もありましたが、減少傾向にあります。ただし、新規でご入会いただいた方もいらっしゃいます。

例会は毎月1回日曜日の午後に行われています。コロナ禍以前は神戸大学文学部棟の教室を利用していました。現在は、たつの市所在の善龍寺所蔵の「善龍寺文書」内の「御本殿御地頭御触記録」をテキストとして読み進めています。例会の進め方は、まず会報を配布して読み上げます。会報は2018年から作成するようになったのですが、活動の振り返りを目的とした備忘録的なものです。前回の例会までの内容を確認したり、通知事項などを記載しています。その後、報告者の作成したテキストの翻刻と必要があれば用語解説や補足説明をまとめたレジュメを配布します。司会は参加者が行い、報告者は司会の指示に従って発表します。そして、翻刻の確認、用語の確認、疑問点などを議論します。なお、司会や例会案内を運営側ではなく参加者に担ってもらう方法は、2011年から始めました。これは参加者の自主性を大切にしたいという前任の河野さんの思いによるものです。司会を担当する方が用事などで欠席する場合は私が代行したりしています。

運営側の私が心がけているのは、どんな質問でも感想でも歓迎という発言しやすい雰囲気作りで

す。

もう一つは何かを決める際にも、私一人では決めずその都度参加者の皆さんに相談するようにしています。

では、ここからはオンラインでの例会の様子を動画で観ていただきたいと思います。今年10月18日に開催した例会で、実際は3時間くらい行ったものを5分程度に編集した動画です。

—映像資料—

予稿集に戻ります。オンラインでの例会を実施できた背景には、普段から例会案内などで電子メールを利用していたことがあげられます。つまり、会員の方が普段からパソコンを使う状況にあったということです。新型コロナウイルスの感染拡大にともない2020年4月の例会は休会としましたが、終息の気配がみえてこないため、会員の皆さんに電子メールで通信環境やマイク・カメラの有無を確認したところ、オンラインでの開催が可能であると判断しました。5月からZOOMを利用してオンラインでの例会を再開しました。私自身は機械には強くないので、まずは「お試しオンライン例会」と銘打って通常のテキストとは違うものを準備してレジュメを作成しない輪読方法でやってみました。すると、案外スムーズにいききました。なお、使い方に不安のある会員の方には事前に個別でレクチャーをしました。体調との兼ね合いでインターネットを使わずオンラインでの例会に参加できなかった方へは、報告レジュメ・会報など例会で共有した資料を郵送しています。また電話でもお話して例会の様子や近況報告をお伝えしています。その方は司会を担当してくれていたもので、参加できない点は本当に残念だと思っています。11月には対面での例会を予定していたのですが、事前に意見を聞いたところ、オンライン希望者が多数であったため、結局オンラインでの開催となりました。その11月例会で会員の皆さんにオンラインでの例会についての感想を聞きました。良い面としては、「移動の心配がいら

ない」、「遠方でも参加できる」、「思ったことを伝えやすい」、「辞書など重い荷物を持ち運ばなくて良い」などがあげられました。逆に悪い面としては、「直接会うことができない」、「対面ならではの雰囲気味わえない」、「同時に発言すると聞き取りづらい」、「勉強以外の話ができない」などがあげられました。

以上が活動報告となります。ここからは志賀蓮子さんにバトンタッチします。志賀さんお願いします。

志賀

私が古文書にと言うか、文字に興味を持つようになったのは、母が女学校時代に使っていた和綴じの帳面を見てからかもしれません。墨で書かれた文字は、何が書いてあるか読めませんでした。きれいだなと思ったのです。古文書を解読するとはどんな事か、分からぬまま文字にひかれて、解読講座に参加するようになりました。主人の転勤に伴い、福岡市・千葉県我孫子市で古文書解読講座を受講しました。特に我孫子市では「解読だけでなく史料として整理し、それを市史作りにつなげる迄行って欲しい」と要望されました。平成十六年（2004）に発行された『我孫子市史 近現代篇』で協力者一覧の中に名前を入れて頂いて、ちょっと嬉しくなりました。

2003年、25年振りに神戸に帰って来ました。神戸にも古文書解読の講座がないかと探していた所、須磨区の広報に「郷土の古文書にふれる会」の案内が出ており、参加を決めました。三人の先生方に、摂州八部郡板宿村関係の古文書を中心に、解説して頂いております。古文書の写真と、解読されたプリントを見ながら、話しを聞くというスタイルです。もう少し解読の勉強がしたいと思っていた所、神戸大学での古文書解読講座の案内が、回覧されたのです。神戸大学で、古文書の勉強が出来るかもと、早速申し込みました。2006年3月、神戸大学近世地域史研究会、通称「研究会」第1回に、参加する事になりました。かつて望んでも叶えられなかった国立大学で学べるのですから、

胸膨らむ思いでした。文学部が建て替え前の校舎でしたから、案内された教室は、本棚に本やら印刷物が、積み上げられていて、机も椅子も足りない状態でした。膝の上に頂いた資料を広げての始まりです。女性の方が多かったと思います。年齢は？古いも若きもでした。皆さん神戸大学で学べる喜びで、キラキラしていました。たつの市や加古川市から参加されている方もいました。それぞれ地元でも、活躍されている様でした。

初めは解読出来ない文字や語句等を調べるのは、辞書等が原則だったと思います。図書館には随分通いました。会友同志電話やファクシミリを使って、教えあったりして割り振られた担当箇所を仕上げていました。何年もしないうちにパソコンやスマホが日用品になり、図書館に行かなくとも、データベースやら、デジタルライブラリ等、利用出来て、使いこなせれば、便利この上ない状況です。今年五月より始まったオンライン例会は、アナログ人間の私にはショックでした。何度も練習と失敗を重ね、六月から何とか参加できるようになり、ほっとしています。重い辞書やたくさんの資料を手元に置いて例会に参加できるのですから、オンラインならではの利便さです。この年齢でこのような経験が出来るなんて思ってもみませんでした。

研究会では、今迄何回かフィールドワークを行っています。教室の中とは違う皆さんがいて、親しみを感じます。雨の中、奈良町から平城京跡へ学生・院生の案内で巡検した時、例会では話す機会もなかった学生たちから、学校生活の様子が聞けました。また、姫路の三ツ山大祭も、「観聞記」の解読をしたからこそその実地見学となった訳です。最近では、柳田國男さん生誕の地福崎町辻川に行きました。前住地である千葉県我孫子市と柳田國男さん御兄弟とは深い関連があり、其処此処に足跡が残されています。私が我孫子市で古文書解読講座を受講していた当時の市史編纂委員長は、松岡文雄さんで、文雄さんは柳田國男さんの兄松岡鼎さんのご長男です。また、我孫子市史研究5の表紙絵は柳田國男さんの弟、松岡映丘さん

の「布佐町鳥瞰図」が使われています。

古文書解読が思わぬ形で、研究会と福崎と我孫子が繋がりに、地縁を感じています。たつの市へはフィールドワークの他、善龍寺の古文書調査に参加しました。大切な古文書の扱い方を教えて頂き、改めて後世に遺す為に、今何をすべきか考えさせられました。善龍寺の二百年以上前の文書を手に取り、読もうとしている文書は間違いなく古文書です。ですが二百年後に現代のプリントされた文書は古文書になるのかな、どうかと、仕様もない方に鋒先を向けてしまいました。両親がどんな字を書いているか知らない世代が増えている今こそ、文字を読む楽しさを、大勢の人に知ってもらいたいと思うのです。古文書解読講座に、どうぞいらして下さい。

2018年5月より、研究会の会報が発行される様になりました。新任なった室山さんの手によるものです。研究会は月一回ですから、疑問点の宿題も、話題になった事も、途切れ途切れになっている事が多く、復習出来る様になり、とても助かっています。特に虫食い等で不鮮明な文字の解読は、写真入りで説明があり、納得出来ます。研究会翻刻用凡例も全員で話し合っ、文書ごとに必要な凡例を加えて改定を重ねています。こうした事も会報で提案があり、その都度解決するスタンスが、研究会の進行をスムーズにしていると思います。四号からは教室での参加者全員で撮った写真が掲載される様になり、研究会の雰囲気伝わってきます。これはオンラインでは望めない事です。コロナが一日も早く終息しますように、そして、大学での例会が再開されますように願っています。

前任者の河野さんには、くずし字を読むだけに終わらせない「研究会」として運営したいという、強い思いをお持ちでした。室山さんは、その思いに加え、メリハリのある行動力で、研究会を引っ張ってくれています。

私達研究会員も、負けない様引っ張ります。今後ともよろしく願いいたします。

第3部 報告⑥

オンラインを利用した古文書初級講座

横山 朋子
神戸大学大学院人文学研究科事務補佐員
河島 裕子
尼崎市立歴史博物館

横山

まず、この講座の事務的サポートを2015年より担当させていただいております横山より、「古文書解読初級講座」についてお話をさせていただきます。「古文書解読初級講座」とは、地域連携センターが主催している公開講座の「まちづくり地域歴史遺産活用講座」の受講生を対象に毎年1回募集しているオプション講座です。その「まちづくり講座」は2010年から始まったプログラムで、今年も開催されましたが、このチラシのように、コロナ禍のためオンラインで開催いたしました。まちづくりについて詳しくはレジュメをご覧ください。この「まちづくり講座」で「もっと専門的に古文書を読みたい」という要望が特に多かったので、この「古文書解読初級講座」が誕生いたしました。

古文書初級講座の会場は神戸大学文学部学生ホールで、定員は20名。テキストは紙媒体で毎回配布する形式です。辞書については重たいので貸し出しすることになっています。また、来場方法は原則として公共交通機関でお願いしています。しかし、今回はコロナの影響によりZOOMを利用したオンラインで開催することになりました。画面の最大表示人数が25名であるため、定員もそれに合わせました。テキストは紙媒体のものを事前に受講者へ郵送しました。

オンラインでの開催にともないましてペンタブレットを購入しました。この点につきましては河島先生よりこの後にお話させていただきます。また、ZOOMの利用はほとんどの方が初めてなので、講座とは別にテストミーティングを実施しました。

講師の先生の紹介いたします。河島裕子先生は

ここ神戸大学人文学研究科の修士課程を修了され、神戸市文書館や尼崎市立地域研究史料館で勤務されていました。今年10月に地域研究史料館が統合され、新しく尼崎市立歴史博物館となり、その、あまがさきアーカイブスで現在勤務されています。2014年から講師をお引き受けいただき、現在まで7回連続でこの講座の講師を担当されています。それでは講座の内容について、河島裕子先生よりお話しさせていただきます。

河島

河島です。私からはオンラインで講座を開催するにあたっての課題やその解決方法、それから講座を今後開催するにあたっての方法論についてお話しいたします。前提として、これまでの講座は初めてくずし字に触れる人を対象としてきました。講師として気をつけてきたことは、まず1回目のテキストは読みやすいものにする。寺子屋の教科書や瓦版などの版本ですね。そして2回目以降は親しみのある地域の史料を使うよう心がけています。テキストに知っている地名などがでてきますと、やはり受講生の反応はよいです。神戸大学の古文書室や神戸市文書館、あるいは尼崎の旧地域研究史料館などが所蔵している史料を使ってきました。初めての方が多いのでとにかく辞書を引く習慣がつくような進め方にしています。受講後も古文書を読むことを続けていけるように、辞書の引き方は丁寧に教えることをモットーとしています。輪読形式を採用している古文書講座は多いですが、私の講座は読みも解説も講師が行います。そのため板書をかなりします。予習は初めての方に難しいので復習に力点を置いています。講座の後に受講者へ翻刻文を配布するのも復習用です。

ところが今年度の講座はコロナの影響により従来の形式ではできなくなりました。これまでは講座のテキストはなるべく新しいものを用意してきました。しかし、さきほどあげた史料保存機関の利用が難しくなったため、代わりにウェブ上に公開されているデジタルデータ史料や過去に利用し

たテキストを再利用しました。コロナ禍を意識して今回は災害関係の史料をテキストに取り上げました。

ただ、テキストが解決してもそれで終わりではありません。オンラインの壁はここからです。まず、初めての方はくずし字の辞書を所持していません。辞書をもっていない人を対象にくずし字を教えるのが第一の問題です。それから板書スタイルはオンラインでは難しい。これが第二の問題です。

第一の問題については、テキストに出てくるくずし字に該当する辞書のページを全てスキャンしました。それから用例辞典の部首一覧ですね。こちらもスキャンして、前と合わせて解説編のテキストを別に作成しました。その上で、史料テキストで読みにくそうな文字に番号を割り振り、それを解説編テキストで確認できるように構成しました。特に難しい文字は解説の手引きを別につけてカバーしました。

ここまでの説明は聞いていてもあまりイメージが湧かないと思いますので、ここからは実際の講座の様子を映像で流します。

—映像資料—

このように辞書のない環境のなかで、受講者には辞書を使ったような体験ができる講座にしました。

次に板書の問題です。さきほど横山さんからお話がありましたが、オンライン開催にあたって事前に液晶ペンタブレット（Wacom Cinteq16）を購入しました。これをパソコンに接続し、PowerPointのスライド画面を投影し、そこに付属のペンで書き込みを行いました。これをZOOMで画面共有することによって板書を再現したわけです。PowerPointのスライド作成は少し難しかったです。1行ごとに分割したテキスト史料の画像を用意してスライドに貼り付ける。その際、余白を行間に設けるのがポイントです。この余白を文字の解説をする際の書き込み箇所とし

て利用するわけです。

史料テキストの後ろのページには関係する解説編テキストを差し込みました。くずし字辞典から史料に出てくる文字を抜粋したスキャン画像がここに貼られており、すぐに文字を探することができるようになっています。これについても実際に受講者が読んでいる様子の映像を流します。

—映像資料—

いま観ていただいたような感じで4回の講座を無事終わりました。講座終了後、受講者の方にはアンケートにご協力いただきました。結果を横山さんから報告いただきます。

横山

従来の対面型で行った昨年度の講座はとても好評で、「大満足」・「満足」を足した満足度が80%と過去最高に高かったのですが、今回はオンラインにもかかわらず、それを上回る85%の満足度を得ることが出来ました。しかし、スライドには受講者23名とありますが、実は本来25名の受講者の方がおられました。2名の方はZOOMの設定が上手くいかず受講ができませんでした。その2名中1名の方は、ZOOMで受講は出来なかったが、メールで翻刻等のデータを受け取れたので、「満足」と答えていただいています。しかし、他の1名の方は講座を受けることが出来ず、このアンケートを受けて頂くことも出来なかった事実があることを申し添えておきます。

アンケートで「大満足」・「満足」と回答いただいた方からは、「時間や交通費をセーブして快適に受講できた」、「はっきり聞き取れ観ることができた」、「後日、回答や動画が配信されるので、出席できなかった場合も講義を受講できるのがオンラインならではの利点です」といった好意的な意見・感想をいただきました。逆に、「集中力が必要」、「先生の手動きが見えず、赤ペンの位置を見失うことがあった」、「互いにオンラインは不慣れであったため、時間のロスが生じたことが残念」、「質

疑応答は対面でのほうがしやすい」、「双方向のやりとりでの不在」、「臨場感の点では対面型のほうがよい」といった声もありました。体力的な負担が少なくなる点、欠席時も後日受講できるし復習も可能であるといった点が、オンラインのメリットとして受け止められたことが分かります。ただし、質問を含めた双方向のやりとりがしにくいというオンラインのデメリットも浮き彫りになりました。なお、対面を希望される受講者のほぼ全員が会場となる神戸大学近辺にお住まいであることも申し添えておきます。

河島

今回初めてオンラインで講座を開催したわけですが、アンケート結果を踏まえても、オンラインはたしかに一つの選択肢にはなり得ると思います。高齢者や遠方にお住まいの方にとっては、受講しやすくなることは間違いありません。ただ、その一方で課題も山積しています。さきほどのアンケート紹介でも触られていましたが、質疑応答がどうしても対面よりもハードルが高くなってしまふ。それに伴い講師や受講生同士のつながりが希薄にならざるを得ず、出会いの場という機能が失われてしまふ。また、対面型の講座では古文書の現物をご覧に入れていたのですが、オンラインではそうした機会を持つことができない。オンラインで受講するための機器や環境整備にかかるコストも課題としてあげることができます。加えて、講師側も講座の準備のみならずテストミートニング、テキストの印刷と郵送、動画配信の設定と案内といった従来はなかった事務作業が発生するので、どうしても負担が多くなります。

オンラインと対面の二つの方法に関する私の意見としましては、「組み合わせる」のが一番よいと考えています。組み合わせ方は今後考えていく必要がありますが、せっきやくオンラインという一つの選択肢がでてきたので、これを対面と組み合わせることで、より多くの人に受講していただけたらなと思っています。

コロナで大変な時期になんとか講座を開催でき

たのは関係者の熱意と工夫によるものです。振り返ってみると大変なこともありましたが、講座を開催できてよかったと感じています。ご清聴ありがとうございました。

コメント

木村 修二
神戸大学大学院人文学研究科

コメント担当の木村です。神戸大学大学院人文学研究科に属しています。よろしく願い申し上げます。

この間、いろいろな場所で古文書講座などを担当しております。さきほどの大下朋子さんのお話にもあった「猪名川古文書を楽しむ会」でもチューターをしておりますし、「丹波古文書倶楽部」や神戸市兵庫区の「平野歴史クラブ」、あるいは神戸新聞文化センターでも講座を受け持っています。こうした活動の原点にあるのは、乾文男さんのお話にでてきた「宝塚の古文書を読む会」への参加です。阪神・淡路大震災後、大国正美さんや亡くなられた石川道子さんといった方々がこの会に参加しました。まだ若い頃だったので、くずし字もそんなに読めるわけではなかったのですが、講師役を担うことになったので随分頑張ったのを覚えています。2000年代を過ぎたころに訳あって「宝塚の古文書を読む会」の活動からは離れることになったのですが、そこで始まった「輪読形式」での古文書読解は、いま私が受け持っている全ての講座に採用している方法です。その意味で今日のお話に出てきたさまざまな「古文書の読み進め方」は、率直な感想として大変勉強になりました。

最初にご報告いただいた「高砂古文書の会」の歌井昭夫さんは、この間、地域連携協議会に何度も足を運んでくださいましたので、いつかお話を聞けたらなと考えていました。本日ようやくそれが実現できて大変嬉しく思っています。最近では成

果のアウトプットに力を入れているということですが、これは「宝塚の古文書を読む会」とも通底する動きであり、会の存続を図るうえで大事な取り組みであることが確認できました。さきほど少し触れた「猪名川古文書を楽しむ会」のご報告については、町運営から自主運営への急な切り替えのなか、大下さんを始め世話人の方々には大変尽力いただいております。古文書の読解力も目に見えて向上しており、今後活動の幅が広がっていくことを期待しています。「平野歴史民俗研究会」の南田潤さんのお話は、解読済の古文書を、地域史研究に活用された事例と位置づけることができます。協議会のテーマ「古文書を読む、楽しむ、活かす」にある「活かす」部分が前面に出た取り組みだと思いました。最後に「オンラインを利用した活動」ということで、「神戸大学近世地域史研究会」の志賀蓮子さんと室山京子さん、古文書解読初級講座である「まちづくり地域歴史遺産活用講座」を担当した河島裕子さんと横山朋子さんのお話がありましたが、いまだオンラインを活用した講座を実施できていない身からすると大変参考になりましたし、参加者の皆さんにとっても刺激ある報告であったと思います。

今回の協議会は「古文書を読む、楽しむ、活かす」をテーマに掲げていますが、これら三つは段階の関係にあります。「読む」ことから始めなければ「楽しむ」ことは生まれませんし、それを経なければ「活かす」こともできません。ですから、「読む」、すなわちくずし字の解読能力をなるべく早く身につけてほしいと思っています。そのため、私はかなりのスパルタ教育方針で講師を務めています。河島さんや室山さんのように優しく教えることのできない無粋な男ですので仕方ないのですが、少しでも早く「読む」段階に到達してほしいという願いの裏返しとして捉えてもらいたいです。では、私の受け持っている講座で「楽しむ」ことは展開できているのか。この間、神戸新聞文化センターの講座でそれに関するアンケートを行いました。設問には「古文書を学びたいと思った動機」をあげています。これに対しては「美術

館・博物館で展示されている古文書を読めるようになりたい」や「掛け軸を読めるようになりたい」、あるいは「神社や寺院の石碑の碑文を読めるようになりたい」などがありました。「読めない字を読みたい」ということですね。ですから「楽しむ」段階はまだ先にある状況だといえます。もっとも、回答のなかには「江戸時代の人々と豊かな目で接したい」というものもありました。こういった「楽しむ」段階に受講者を早く引き上げていきたいと考えています。

その先にある「活かす」についても少しお話します。以前に出版した『地域歴史遺産の可能性』(岩田書院、2013年)や『地域歴史遺産と現代社会』(神戸大学出版会、2018年)でも書いたのですが、古文書を社会教育ツールとして生涯学習などでもっと活用する取り組みを展開する必要性を感じています。また、古文書学習会を、サークル活動の枠に収斂させるのではなく、そこで得られた知識や技術をさまざまな場面で活用してもらう仕掛け作りみたいなものも必要があると考えています。これについては先ほど提示したアンケートでも、「体得した古文書読解技術を何に活かしたいか」という設問を立てて参加者の考えを調査しました。それによると、家に伝わる過去帳や古文書の読解への挑戦や、自分の「脳トレ」にするといった回答、「まだまだ読解もままならない」ので「活かす」ことについては考えていないという回答がありました。ただその一方で、複数の方から「地域で古文書を解読する機会があれば参加したい」、あるいは、おそらく古物商の方だと思いますが「仕事で古文書に接する機会があるので商売に活かしたい」といった講座で学んだことを外で活用したいという回答もありました。

私は神戸大学では三木市の自治体史編纂を手伝っている立場です。三木市では以前から市民ボランティアの方々が古文書の整理をやっていきます。このような場は決して多くはないのですが、講座受講者にはこういった場に積極的にかかわってほしいと思っています。本日のお話全体を聞いて、講座で学んだことを活かす場を、神戸大学含

めでもっとたくさん提供できるようにすることが大事になってくるなと感じました。以上で私のコメントと代えさせていただきます。ありがとうございました。

全体討論

司会 奥村弘

司会（奥村弘）

司会の奥村です。よろしくお願ひします。本日のお話を私なりに整理すると三つに分けられると思います。まず一つ目に、「古文書を読む楽しさ」を多角的な視点で捉えることです。講座にしろサークルにしろ、そこには、一人で「読む」のではなく、多くの人と一緒に「読む」スタイルが共通しています。ただ、「楽しさ」についてはまだまだ深めて考える必要があるように感じました。これについては質問をいただいているので、参加者の皆さんから問題提起なり質問なりを出していただければと思います。

二つ目は、コロナの発生という状況変化の問題です。人同士の物理的距離の確保が必要となった結果、従来とは異なるオンラインで「読む」スタイルが生まれてきました。4月以降、大学での授業がオンライン形式となり、教員が四苦八苦しているなか、それとほぼ同時期に、「神戸大学近世地域史研究会」では運営担当の室山さんがオンラインでの古文書読解を進めていたことにはとても驚きました。さらに驚いたことは、70代・80代といった年配の方も参加できたということです。高齢者でもオンラインツールを使いこなすことができたという事実から、神戸大学大学院人文学研究科と地域連携センター主催の「まちづくり地域歴史遺産活用講座」も中止ではなく、オンライン開催することにしました。準備や当日の様子についてはさきほどの河島さんと横山さんの報告にあった通りですが、さらなる工夫やコロナ終息後の利用といった新たな論点が浮かび上がってきた

と思います。

三つ目は、古文書サークルや講座の関係者が一堂に会して直接お話をさせていただくことによって得られたさまざまな情報です。いずれのお話にも、運営の仕方や世代交代といった活動の継続に関する悩み、あるいは新たな参加者によって広がった活動の可能性について言及がありました。今日お集まりの皆さんも、これらの問題について情報共有したい点が多々あると思いますので、前二つと合わせて総合討論で議論したいと思います。

まずは、休憩時間にいただいたこれら三つの観点に関する質問を紹介します。まず「三木古文書研究会」のカジイさんから「高砂古文書の会」の歌井さんへの質問です。出版された解説本は高砂市立図書館で閲覧できますか、とのこと。歌井さんお願いします。

歌井昭夫（高砂古文書の会）

解説本は計5冊ございます。いずれも発行時点で高砂市立図書館へ寄贈していますので閲覧は可能です。

奥村弘

ありがとうございます。それではつぎの質問に移ります。さきほど申し上げましたように、地域連携センターは今年度の「まちづくり地域歴史遺産活用講座」をオンライン形式で開催しました。それに関連して、コロナ禍における地域連携センターの活動で「やってほしいこと」、あるいは、センター側からの「できること」を議論できればよいのではないかと、という意見をいただきました。報告者も含め、「やってほしいこと」についてご提案があればぜひお願いします。また逆にセンター側からも「できること」について話したいことがあればお願いします。いかがでしょうか。

室山京子（神戸大学非常勤講師）

私は機械が得意な人間ではないのですが、ハイブリッド形式で研究会や講座の開催を実現してみたいです。地域連携センターのスタッフの方々に

は一緒に考えていただきたいですし、ハイブリッド形式だけでなく、さまざまな方法論も議論・構築できればよいのではないのでしょうか。

奥村弘

そうですね。「対面」と「遠隔」の組み合わせ方はいろいろあると思います。ほかの方がいでしょうか。室山さんと一緒に報告された志賀さん、いでしょうか。ご感想でもかまいません。

志賀蓮子（神戸大学近世地域史研究会）

そうですね。パソコンは全く触ったことがなかったもので、ここに至るまでは室山さんにお世話になりっぱなしでした。今よりも操作性が分かりやすくかつ簡単な方法が出てくるようであれば助かります。

奥村弘

ありがとうございます。ほかいでしょうか。

木村修二（神戸大学大学院人文学研究科特命講師）

指名してもよいですかね。松下さんが参加されているようなので、前の職場の大学で通信講座などを担当されていたと記憶しているのですが、そこでの実践の話は参考になると思うので聞いてみたいです。

松下正和（神戸大学地域連携推進室准教授）

松下です。その講座ですが、普段はレポート形式にして、春や夏の長めの休みの時に対面形式での集中的な講義を組み合わせていました。年に一時しかお会いする機会がないので、本日のお話にあった研究会や講座のような頻度での対面ではありません。なので、私が受け持っていた通信講座は、対面形式に慣れた方にとっては「物足りない」ものだったかもしれません。ただ、短い時間での対面は集中できる点がメリットにもなると考えています。

奥村弘

ありがとうございます。まだまだ試行錯誤の段階ではありますが、地域連携事業におけるオンラインやハイブリッドの活用はセンターでも引き続き考えていきたいので、もし関連するご相談などありましたら遠慮なくお寄せください。

それではつぎの質問に移ります。オンラインの普及にともなう地域の資料館・博物館・図書館などの利用頻度に変化が生じているのではないか、という質問です。これについては尼崎市立歴史博物館の河島裕子さんにご回答いただければと思います。

河島裕子（尼崎市立歴史博物館）

河島です。現在、尼崎市立歴史博物館の「あまがさきアーカイブズ」で働いています。うちの職場は地域の方が気軽に調べにこられるような場所となっていますが、コロナ下でも利用者の数にほとんど変化はありませんでした。尼崎市立歴史博物館は文化財収蔵庫と地域研究史料館の機能を統合して、今年10月にオープンしました。オープン前はおおよそ4ヶ月の間閉鎖していたわけですが、その反動もあってか開館後もたくさんの方に利用していただいています。

奥村弘

ありがとうございます。ほかの関係者のお話も聞きたいところですが、時間もありますので、このまま進めていきます。つぎの質問は、研究会で取り扱う史料の内容や運営のあり方は、コロナの影響を受けて変化したりしたのでしょうか。もしあれば教えてください、というものです。これについては第1部と第2部の報告者の方々に聞いてみたいと思います。まず、「高砂古文書の会」の歌井さんいでしょうか。

歌井昭夫

例会を休止にしたりはしましたが、大きな変化はありませんでした。ですから会の持ち方がコロナ前後で変わったということはないですね。

奥村弘

ありがとうございます。では「猪名川古文書を楽しむ会」の大下さんはいかがでしょうか。

大下朋子（猪名川古文書を楽しむ会）

コロナによって少し時間ができましたので、前から読みたいと思っていた吉田松陰の『留魂録』や大塩平八郎の檄文を読んだりして楽しんでいます。会として特別変わったことはありません。

奥村弘

ありがとうございます。それでは「宝塚の古文書を読む会」の乾さん、いかがでしょうか。

乾文男（宝塚の古文書を読む会）

今は宝塚の中央図書館の研修室と集会室をお借りして活動しています。研修室はおよそ25名、集会室はおよそ80名入るので、なるべく後者の広いほうを会場として利用するようにしています。ですので、この集会室を会場として押さえないければ活動が難しい状況になりました。それから、除菌や換気、参加者の間隔にも気を遣っています。

奥村弘

ありがとうございます。それでは「平野歴史民俗研究会」の南田さん、お願いします。

南田潤（平野歴史民俗研究会）

私どもの会はコロナが起きてからしばらくの間は休会していたのですが、再会したときに会場の設営の仕方を少し変えました。それまでは円卓を利用して参加者の顔が見渡せるように進めていましたが、再開後は、講義形式、すなわち担当の者が前でしゃべり、ほかの者は全員それと向かい合うようにしました。ただ、その形式で2回ほど活動したのですが、これではどうも話が盛り上がりませんということで、再度円卓を利用することにしました。ただし、間隔をなるべくとって座るようにしています。そうすると離れてはいるものの目を見ながら会話・議論ができるのでやりやすく

なりました。以上です。

奥村弘

ありがとうございます。この全体討論の場では、さまざまな情報を共有することも狙いとなっています。コロナの状況下でどんな活動の変化があったかは、今後の活動の参考材料にもなりますので、参加者の皆さんからももし何かあれば後でご発言ください。さて、続きまして今の質問と関連するのですが、地域の歴史文化の次世代の担い手となる大学生や高校生を対象とした「教育」の現場や彼らの意識などにコロナの影響はありましたでしょうか、という質問をいただいています。学生になかなか会えないので分からないこともあるとは思いますが、市沢先生いかがでしょうか。

市沢哲（神戸大学大学院人文学研究科教授）

市沢です。現状をいえば大学教育に大きな変化が生じている真っ最中なので、教員側はそれについていくのに精一杯です。奥村先生の言うとおりで、学生となかなか会えないので、彼等が何を考えているのかについて、向き合っただけで話しかけることができなくなりました。これについてはこの先きっちりとやらなければならないと思っています。これまで知らなかった技術が便利なのはたしかにあるのですが、そこで抜け落ちていくものは何かを見定めることが大事になってくるはずで、どこかで一度落ち着いて検証する機会を設ける必要はあるでしょう。神戸大学の教員の立場からすると、対面での授業ができないことはもちろん問題なのですが、それ以上に学生が地域連携センターの事業などを介して社会に出て行くといったことが全くできなくなったことが問題だと感じています。個人的な話でいえば、「神戸村文書を読む会」という学生が講師となって市民の方と一緒に史料を読む会を担当していたのですが、コロナによってそれを続けることができなくなりました。この会は学生が自分の勉強してきたことの意味を確認したり、市民の方々が興味を持っていることを実感できるなかなか得がたい教育の場で

した。それができなくなってしまったことがとても残念です。

奥村弘

ありがとうございました。いただいた質問は以上となります。若干時間がありますので、参加者の皆さまからの質問を受け付けたいと思います。いかがでしょうか。

木村修二

すみません。私から質問よろしいでしょうか。乾さんに質問したいのですが、私は「宝塚の古文書を読む会」に初期のころ参加していました。今日のお話を聞いて活動の幅が広がっていてとても驚いたのですが、そのなかであげられていた「寺子屋」の講師はこの会で勉強された会員の方が担ったという理解でよろしかったでしょうか。

乾文男

会員の方が講師を担当するケースと和田正宣さん自らが担当するケースがあります。新しい講師を養成していくことが会の一つの課題となっています。

木村修二

ありがとうございます。受講者が先生になれたというのは画期的な成果だと私は思います。古文書読解のスキルを会の継続に活用できている事例といえると思います。ありがとうございました。

奥村弘

ありがとうございました。あと一つくらい受け付けられます。いかがでしょうか。

井上舞（神戸大学大学院人文学研究科特命助教）

参加者の皆さんに聞いてみたいのですが、今日の報告を聞いて自分たちの活動と「同じだ」と感じたことや「違うな」と感じたことがあると思います。協議会の担当者としてはこれが気になっているので、この辺りのことについてご発言いただ

ければと思います。

奥村弘

少し難しい要求からかもしれませんが、感想でもかまいませんので、最後に報告者の方々からいまの質問に回答してもらってまとめにしたいと思います。それでは報告順にお願いします。

歌井昭夫

本日の協議会で同じような活動を展開している会もありますし、オンラインを活用して先端を行っている会もあることが確認できました。われわれもそれらに学びながら活動を続けていきたいと思っています。

大下朋子

協議会には初めて参加させていただきましたが、ほかの会の歴史ある活動に驚いています。私たちはスタートにたったばかりの感じがしていますので、続けて頑張っていきたいと思います。

乾文男

私自身の活動歴は6年目なので、まだまだ駆け出しです。せっかくなのでいま横に座られている同じ会の中安さんから話をいただければと思います。

中安

中安と申します。小学校の教員を40年近くやってきて、今年で退職して5年となります。オンライン元年である今年は、小学校でプログラミング学習が必修化したプログラミング元年でもあります。子供たちはとにかく何でも習得が早い。逆に年配の方は新しいものに抵抗を感じる人が多いと思います。例えばZOOMを会に導入しようにもお金がかかりますし、すぐに使えるようになるか分からない。コロナの終息はまだ先のことになるような気がしますので、さきほども話題にあがりましたハイブリッド形式での活動が求められるように感じています。乾さんがおっしゃり

ましたように、消毒や換気の徹底など、かなり気を遣って会を運営している状況ですし、会場が閉鎖されてしまう不安もあります。ただ、このような状況下でも工夫しながら素晴らしい活動を行っている報告が聞けて、とても参考になりました。ありがとうございました。

南田潤

私どもの会は報告でも申し上げましたように活字史料の勉強をしています。古文書を活字化している皆さんの報告を聞いて、自分が勉強できているのは、皆さんが地道に続けていらっしゃる古文書の活字化があってこそなんだなということを強く感じました。古文書教室には通っていますが、まだ皆さんのようには読めません。ですので、古文書の活字化を大変ありがたく思っています。皆さんの活動の成果として残された活字史料はいつか誰かが必ず読むことになり、「この史料、本当に残っていてよかったなあ」と思ってくれる方が現れるはずです。皆さんにはこれからも活動を続けていただければと思っています。ありがとうございました。

志賀蓮子

私はもう少し若い方に参加してほしいなと思っています。「神戸大学近世史研究会」に入って10年経ちますが、当時はまだ黒髪でした。ところがだんだん周りの方と同じように歳を取ってきて、若い方の力がほしいなと思う場面が増えました。ZOOMを使える若い世代と私のように四苦八苦する世代の間には何か分断があるように感じますが、その間に立てるような人が出てくれば、会の活動の輪が広がると考えています。

室山京子

オンラインを用いているいろいろやってきましたが、今日久しぶりに神戸大学にきて、リアルで人に対面することがとても貴重なことであることをあらためて感じました。今後どのような状況になるかは分かりませんが、今日お会いしたり知るこ

とのできた各地の会に私たちの会がお邪魔して見学したりすることも実現できればよいかと感じました。ありがとうございました。

横山朋子（神戸大学大学院人文学研究科事務補佐員）

私は普段、神戸大学の古文書室にいます。古文書とはすごく近い距離にいるにもかかわらず、これまでは「まちづくり地域歴史遺産活用講座」でしか古文書と携わることはありませんでした。ですので、この講座を受講された方がその後どのような活動をしているのかは全く知りませんでした。本日の皆さんのご報告を聞いて、皆さん講座で学んだことを各地で活用していることを知ることができました。講座に若い人が参加するようになれば、各地の会にも参加してくれるようになるかもしれません。講座がそのような役割を果たす場になればよいなと思っています。ありがとうございました。

河島裕子

ここ7年間ほど「まちづくり地域歴史遺産活用講座」で講師を担当してきましたが、初級講座なので「もっと勉強したいので、どこに行けば古文書を読むことができますか」とよく聞かれます。受講者は神戸市灘区在住の方が多く、そういった方には実はご案内するところがあまりありません。そのため言葉に詰まることが多かったのですが、オンラインを活用すれば住んでいる場所関係なく、好みやレベルに応じて各地の会に参加できるようになるなど感じました。ありがとうございました。

奥村弘

皆さん、ありがとうございました。オンラインという新しい方法が出てきたことによって、これまでの「古文書を読む」ことについても、さまざまな可能性があることが確認できたと思います。逆に対面形式での活動が難しいことによって生じた問題も確認できました。コロナ終息後も続けら

れる新たな活動スタイルの模索が各地で始まっていると今日のお話を聞いていて感じました。地域連携センターとしましても、その点でいろいろとご協力できればと考えています。最後に井上さんから一言お願いします。

井上舞

本日は地域連携協議会にご参加いただきありがとうございました。

今回初めてオンラインで開催したわけですが、協議会の目的である〈人のつながる場〉として役割は果たせたと思います。引き続き次年度以降も地域連携協議会をよろしくお願い申し上げます。以上をもちまして「第19回歴史文化をめぐる地域連携協議会」を終了したいと思います。本日はありがとうございました。